
F.F.FIGHT Ω



ガチャン――
分厚い鉄扉のドアが閉まり、重苦しいカギがかけられた。
「ここは？　あなたたちはいったい誰なの？」
先の戦闘に敗れ、捕虜としてとらえられたアーシェ
仲間たちと引き離され、
連れてこられたのは狭い部屋だった。
室内には彼女以外に数人の男たち。
その全員がニヤニヤと下卑た笑いを浮かべている。
アーシェはその態度の悪さに、強い苛立ちを抑えた。
「なんのつもり？　捕虜にするなら条約を守りなさい
仲間たちをどうしたんです？」
「さぁ、どうしたのかねぇ？」
「下品な……私を誰だと思っているの？
無礼な真似は許しませんよ？」
「どう許さないっていうんだ？」
部屋まで連れてきた男が、アーシェににじり寄ってきた。
その威圧感に一歩引いてしまうが、
気丈な性格ゆえに目線は逸らさない。
「私をアーシェ・バナルガン・ダルマスカと
知っての狼藉ですか！？
今すぐこの部屋から開放して、
正当な賠償としての扱いを求めま　きゃあっ！」
肩を小突かれ、また一歩下がる。
ニタニタと笑う男たちが一斉に
アーシェを取り囲み、その輪を詰めていった。
「な、なんなの？　近寄らないで！」
「さすがはお姫様。ここまで来て、
まだ状況が分かってないようですな」
「なにを言ってるの？」
「ですから、あなたがアーシェ殿下ということも
分かった上で、こちらへお連れしたってことですよ」
「えっ」
「どうせお上に引き渡せば処刑されるんでしょうから、
その前に我々と楽しみましょう！」



左右から腕に押さえつけられ、台座へと仰向けにされる。
その状態はまさにまな板の鯉。
「放して！　放しなさい！」
「イヤだね。お姫様を抱けるなんて、
そうそうないチャンスだからな」
「そうそう。オマエも死ぬ前に俺たちと楽しもうぜ？」
「なにを言ってるの！？　誰があなた達などと、
は、放しなさいと言ってるんです！」
男たちは放すどころか、身動きの取れないアーシェの身体を
撫で回し始めた。無遠慮な男の手が、
腕を、足を、腹を、そして乳房にまで伸びる。
「やめなさい無礼者！
こんなことをしてただで済むと思ってるの！？」
「気が強いな。さすがは反乱軍を率いてるだけのことはある」
「反乱軍じゃない！解放軍よ！」
「どっちだって同じだぜ――――皮剥いちまえばな！」
強引に服を引き裂く男に、
アーシェは羞恥よりもまず怒りを覚えた。
「くっ…戦闘の疲れが残ってるんだわ。そうじゃなければ、
こんなヤツらに後れを取ることなんてないのに！」
服を剥ぐ男、それを眺めてはやし立てる男。かまわず、
体中を撫で回す男。
アーシェは殺気のこもった視線を送りつけるが、
誰1人として気にする者はいなかった。
「さて、それじゃあ、お姫様のおっぱいを揉ませてもらおうか」
「くっ！　こんなこと、許されるはずが……ああぁ！」
四肢を押さえられたままのアーシェに、
抵抗するすべはない。衣服が剥ぎ取られ
乳房があらわにされた。



「いやぁ！　み、見るなっ！」
思わずあがってしまった情けない声に呼応して、男たちからは歓喜の声があがる。そして我先にと、アーシェの胸に掴みかかった。
「触ることを許した覚えはありませんよ！？　やめなさいっ……くっ！」
「コレがお姫様のおっぱいか」「柔らかくて、たまらないね」
「見ろよ。もう乳首が勃起してるぜ」
「感じてるんだな。とんだ淫乱女だ」
口々に淫らな言葉を投げかけてくる男たちに、アーシェは歯を食いしばって耐える。
（悲鳴なんてあげたら、こいつらを悦ばせるだけだわ。私は絶対に負けないんだから！）
しかしそんな我慢も、股間に手を伸ばされた瞬間に限界に達してしまう。モゾモゾと這い回る指の嫌悪感に、悲鳴をこらえることができなかった。
「なっ、なんてトコロを触るの！？　恥を知りなさい！」
「お姫様は性奉仕を知りなさい！」
「ははは、気持ちよくしてやるから安心しなよ」
「早くココに突っ込みてぇ」
「待てよ。普通に犯すだけじゃ面白くない。尻の穴なんかどうだ？」
「そりゃあいい。高慢ちきなお姫様には、似合いの陵辱だぜ」
アーシェには、男たちの会話の半分も理解できなかった。
いや、理解したくなかった。
しかし乳房を乱暴に揉みしだかれ、乳首をつねり上げられ、ショーツの上からとはいえ股間を指で回されて、ようやく自分が輪姦されるのだということに気付かされる。
そしてアーシェは、噴き出しそうになった悲鳴を呑み込んだ。
「くっ……はっ、放せ、この変質者どもが！　汚い手で触れるな！」
「おっと、まだ抵抗しやがるのか」「ふんじばっちまえ」
「ケツを上げさせろ。たっぷりとなぶってやるぜ」



一人が号令を出すと、腕を押さえていた連中が手際よく縛り上げた。
まるで犬のような格好をさせられたアーシェは、
屈辱に身震いさえおぼえる。

「こんな屈辱的な格好、許すわけにはいかない！」
「いつまでそんなデカい口がきけるかな」

頭を押さえつけ、床に擦りつけられる。それがまた
激しい屈辱となり、アーシェの自尊心をズタズタに切り裂いた。
男にとってはそれが悦びだったのだろう。
満足げな笑みを浮かべ、突き出された尻を撫で回し始めた。
それを合図にして、他の男たちも、尻や胸へと手を伸ばす。

「いいケツだな」「プリップリで旨そうだぜ」
「早く突っ込んで喘がせたいな」
「下劣な！　私は、こんなことで屈したりは……っくう！」

尻を触る手は想像以上に乱暴だった。掴まれ、双丘を割られる。
ショーツこそめくられはしなかったが、
上から肛門や陰部をつつかれ、指で回された。
同じように、脇の下から伸ばされた手が乳房に掴みかかり、
引っ張る。まるでもぎ取られるかのような痛みに、
アーシェは苦悶の喘ぎを漏らさざるをえなかった。

「ははっ、感じ始めてきたみたいだな」
「そんなに焦らなくても、すぐにイかせてやるぜ」
「馬鹿なことを。感じてなどいないわ！
誰が貴様らのような卑怯者の手でなど！」

なんとか逃げだそうと身をよじるアーシェ。
しかし男たちは嘲笑いをやめることなく、
更なる拘束具を持ち出した。



「はははは、いい格好だぜ」「姫様ご無様〜」
「荒縄が似合う姫様なんて、あんたくらいのもんだ」
「死んじまった王子とも、こういうプレイで楽しんでたのかい？」

屈辱と悔しさで涙がにじんだ。
アーシェは心の中で亡き夫に詫びるしかない。
しかしそんな心の中にさえ、男たちの笑い声が入り込んできた。

「さぁ、まずはどこから犯して欲しい？
口か、胸か、それとも、最初からおま○こに
突っ込んでやろうかっ」
「ふざけないで――そんなこと、許すはずがない」
「みんな最初はそう言うんだ。でも、一度突っ込まれれば、
泣いてせがむようになる。もっと犯してくれ、
もっとおま○こをグチョグチョにしてくれってな」

男たちの視線は、早くも股間に集中していた。
中には乳房に目をやり、それだけでは飽きたらずに
触れてくる者もいるが、多くが開かれた秘部を凝視して
息を荒くしていた。

（私、もうダメなの？　こいつらに好きにされるしかないの!?）

邪気な笑いが室内を駆けめぐった。
その瞬間から身体に小さな震えが走る。
陵辱されるのだという恐怖心が湧き上がり、
アーシェの心をさらにくじく。

「私は、ダルマスカの王女よ……貴様らのようなケダモノに、
屈したりなんかしない」

必死に声を出して、自らを奮起させるしかなかった。



しかし男たちは、そんな思いすら簡単に打ち砕く。

「今のあんたには、王座じゃなくって
このボロ椅子がお似合いなんだよ」

縛られたまま、無理矢理椅子に座らされる。
それを取り囲むようにして、
男たちが両方から身体に触れてきた。

「このボロ玉座に座ったままイかせてやるよ」
「確かにそれがお似合いだな」

男はためらうことなくショーツを剥ぎ、
淫らになっている秘部を男たちの視線に晒した。

「すごいな。もう濡れ濡れだ」
「なんだ、けっきょく感じてたんじゃないか」
「ちっ、違う！ 感じてなどいない！」
「だったら、このおま○こはなんなんだよ」
「犯されることを期待してたんだろ!?」
「違う……違うの。感じたりなんかしてない……
私、欲しがったりなんかしてない」

否定する間も、男たちはアーシェの敏感な部分を嬲り続けた。
乳首をつまみ、引っ張ったかと思うと乳房全体を揉み込む。
左右から別の男が手を伸ばし、広げるように引っ張った。
それよりも陰唇への愛撫は激しかった。
まだ包皮をかぶったままのクリトリスを無理につまみ、
敏感な粘膜の突起を剥き出しにされた。
指先に愛液を塗りつけ、その突起を指で回される。
その刺激はアーシェの理性を確実に削り、
堪えることのないあえぎ声を出させた。



「やめて！　そこは、激しすぎるから……ああぁ！　きゃあっ！」
もっとも敏感な部分をなぶられ、
アーシェはたまらず悲鳴をあげた。
男たちはいやらしく顔を歪め、その痴態に見入る。
そして今度は自分が、とあちこちから股間に手を伸ばした。
「ダメ、そんな大事に触られたら、こ、壊れちゃうっ……んうう！」
「もうベトベトだ」「熱くてヌルヌルで、最高のマ○コだな」
「指一本でもキツキツだぜ。こりゃあ、あんまり使い込んでないな」
「俺にも触らせろよ」
男たちは代わる代わるアーシェの膣へと手を伸ばした。
執拗にクリトリスをつまむ者、
手のひら全体で土手を揉みほぐして悦ぶ者、
膣へと指を突っ込み、中をほじくり返す者。
そんな多様な攻めに、アーシェは絶頂感を覚え始めていた。
「も、もうやめて。ソコはっかり弄らないでっ……、
私、おかしくなっちゃうっ！」
「おかしくなっていいんだぜ」
「何度でもイけばいい。いや、イかせてやるよ」
「もうすぐだな。ほら、イっちまえよ！」
「乳首もすげえ突っ立ってるぜ！」
男たちの声が、ひどく遠くから聞こえてきたような気がした。
アーシェは這い上がってくる絶頂感から逃げるように
身をよじるが、当然逃げられるはずもない。
「ダメ！イきそう！私、こんなヤツらに犯されてイきそう！
気持ちよくなっちゃいけないって分かってるのに、
もう我慢できない！」
「駄目っ、駄目ええ！
指でなんかイきたくないのにいいいっ……！」
しかし、身体は正直だった。
まるで電気が走ったかのようなスパークが、
アーシェの心を焼き尽くす。
「ああ、そ、そんな……私、こんなヤツらにイかされたの？」



ぐったりとするアーシェに、
男は笑いながら「本番はこれからだぞ」と告げた。
そして椅子から抱え上げ、ベッドに這わせる。

「え……なに？」
「本番だって言っただろう！」

男は、いきり立った男根を
アーシェの尻へとめり込ませた。

「なっ？　そこは痛うっ、
そこは挿れるところじゃ……
あああああああっー！」

男のペニスが、狭いアヌスを切り裂いて挿入された。
本来、異物を受け入れるようできていない場所への挿入は、
アーシェの理性を著しく崩壊させる。

「だっ、ダメ！　抜いてっ、そこから抜いてええええー！」
「くうー　いい締まりだ、最高のケツだぜー
こんなの、すぐに出ちまうー」
「いやっ！　やめてよっ……痛いっ、ああ、痛いっ！
抜いて、抜いてえぇ！」

「すぐに楽しくさせてやるよ」
男はそう言って、激しく腰を前後させ始める。
アーシェは痛みと屈辱に心を折られ、
喘ぐことしかできずにいた。
直腸を掻き分けてめり込んでくる男根。
その圧迫感と痛み、
しかしその中にもじんわりとした
快感を覚えてしまい、アーシェはさらに喘ぎまくる。

「いや、なにか来る、来る……来ちゃううう！」
「いいぜ。イけよ！　俺ももう……っくううう！！」
「ああああああっ、いやああああああああ！！」

尻の中で、男のモノが爆発した。



「ああ――ああぁ――」
絶望的な悲鳴が漏れた。
しかし、その中に快楽の響きがあることを、
他ならぬアーシェ自身が感じ取っていた。
「ふぅ、いいアヌスだったぜ。さすがは王女様だ」
「くぅ……私は、私はぁ……んっく」
ペニスを引き抜かれた肛門から、
中出しされた精液が溢れ出た。
その光景を他の男たちにもよく見えるようにする。
肛門はもとより、愛液に濡れそぼった女陰を見て、
男たちは息を呑み、舌なめずりをする。
「次は俺の番だ」
「いや、俺が」
「焦るなよ。まだまだ時間はたっぷりとあるんだ」
「ああ……ま、まだっ」
「そうさ。まだまだ終わりじゃない。
体中の穴という穴、
全部に俺たちのザーメンを注ぎ込んでやるからな」
その言葉に、アーシェは
自分でも驚くほどの官能を覚えていた。
輪姦される快感に目覚めてしまったのかもしれない。
理性では認めたくなくても、
身体が男を求めてしまっている。
それは、もうずいぶん前に無くした、
女としての本能だった。
「悔しいけど、私、お尻の穴を犯されて感じた……
イってしまったのね。ああ、ごめんなさい。ラスラ。
私、汚されてしまった――」
「よし、それじゃあ、アヌスとヴァギナ、
同時に犯すっていうのはどうだ?」
もうろうとしたままのアーシェの耳に、
凄まじい言葉が飛び込んできた。



「あぁあぁ、凄い！　これ凄いいいい──！」

まずは膣に突き刺された。
子宮まで貫きそうな巨根をくわえ込みながら、
同時にアヌスにも挿入される。その圧迫感は、
アーシェの想像をはるかに超えていた。

「お腹の中で、ふたつのペニスが擦れてっ……
くうっ……こんなの、壊れちゃう！」
「す、すげえ締まりだ！　こんなのすぐに出ちまう！」
「ケツも凄いぞ。その辺のマ○コよりよっぽどいい具合だ」

気が早いか、男たちは腰を動かし始めた。
リズムを合わせた輸送は、
まるでひとつの音楽を奏でるかのような
水音を響かせる。

「あぁ、ダメ！　またイっちゃうっ、またイっちゃうぅぅ！」
「あぁ、いいぞ！　イけ！　イっちまえ！」
「たっぷりと中で出してやる！
体中精液まみれにしてやるからな！」
「来てっ、精液来てぇ！
もっと激しくしていいの。もっと犯していいのお！」

官能の叫びに、絶頂の波が轟った。
アーシェは体内に注がれる熱い塊を受け止め、
自らも高みへと達する。

「ンあぁあぁあぁあ‼　いい、いいのぉ！
もっと、もっと出してえぇぇ……！」

男たちの笑い声に、
アーシェは自分が堕ちたことを悟った。
そして、繰り返される絶頂に、
その理性を溶かしきった──





「おかしいわね・・ここにはもうずいぶん前から、
人は住んでいないと思ったんだけど」

ストライフ・デリバリーサービスに荷物運びの依頼がある、
と電話があったのはつい先ほどのことだった。
しかし、荷物を引き取りに来た家はもう廃墟と言っても
差し支えないほどの荒れようだ。

「やっぱり悪戯だったのかしら……」
「へえ、こりゃあ大した美人だ」
「え!?　だ、誰!?」

背後からかけられた声に慌てて振り返る。
しかし、振り返った瞬間、
ガスのようなものを吹きかけられた。

「な…?　なによこれ　身体が、重い?」
「よく効くガスじゃないか」
「そりゃあそうでしょう。特注ですからね」
「高い金を払う価値があったってワケだ」
「　らしいな。くはは」

物陰から数人の男が出てきた。
みな屈強な感じではあるが、
決して太刀打ちできない相手ではなさそうだった……。
身体が本調子なら。

(神経ガス!?　身体の自由が利かないっ!)

「さて、のこのこやってきたヒツジちゃんを
可愛がってやろうか」
「飛んで火に入る夏の虫ってね。へへへっ」



「は、放して！　なにをする気なの！？」
「男と女がやることはひとつに決まってるだろ」
「ひとつって……わたしは、仕事の荷物を取りに来ただけよ？」
「ああ、荷物ね。運んでもらうぜ？　俺たちのザーメンを、あんたのおま○こでご自宅まで運んでくださ～い。あははははっ！」
（こいつら、最初から強姦が目的だったのね……まんまと騙されたってワケか）
自分の迂闊さに歯噛みする。こんなゴロツキのようなヤツらに遅れを取ってしまったことにも。
男たちは、そんなティファの苦悶の表情を恐怖からのものだと思いこみ、嗜虐的な笑みを浮かべた。
「怖がらなくても、ちゃんとイかせてやるから安心しな」
「そうそう。俺たちは紳士だからよ」
「お仕事もちゃんとな。荷物もザーメン、お代もザーメンだけどよ」
「くっ」あまりに下劣な男たちに、ただ怒りしか湧かなかった。
しかし身体の自由が利かない。
立っているのがやっとといった状態のティファに、四方から手が伸ばされる。
胸を押さえ、背後から抱きかかえられた。
すぐさま胸をはだけさせられ、巨大な乳房を晒される。
「きゃあ！　見ないでっ！　放してよ。卑怯だと思わないの！？」
「だから、ちゃんと感じさせてやるって」
「そうそう。それでおあいこだろ？」
「あんたも楽しまなくちゃ。損だぜ？」
男たちは、まともな人間の言葉が通用する相手ではなかった。



「うひょー、でけえ～～！　こりゃ、たまらねえぜ！」

背後から、乱雑に乳房を揉みしだかれた。
力任せの愛撫は、もちろん感じさせるためではなく
屈服させるためのものだ。
ティファは怯みを見せないようにと、
気丈な態度で立ち向かう。

「くっ……こんなことで感じたりなんかしないわよ？」
「いいぜ？　そう簡単に折れられても
つまらないからなあ」

男たちの笑いが、卑猥な合唱に聞こえた。
やはり口でなにかを言うよりも、
早く身体の自由を取り戻して
抵抗するしかないようだった。

「デカくてたぷんたぷんだ。乳首も、ほらっ」
「あうっ」
「コリコリしてつまみやすいぜぇ」

身体の自由は奪われているのに、
感覚はまったく消えていないのが気に障る。
男の下手な愛撫に感じたりはしないが、
敏感な部分を触られれば身体は
否応なく反応してしまう。

「くっくっく、もうちょっともってくれないと、
犯し甲斐ってのがないぜ？」
「――おあいにく様。あんたみたいな下手くそに
いくら揉まれたって、なにも感じやしないわよ」

実際に揉んでる男以外の全員が吹き出した。
男は憎々しげに舌打ちして、胸から手を放した。



もちろん、それは陵辱の終わりではなく
始まりの合図だった。
いまだ動かぬティファの身体を押さえつけ、
ローションのようなものをその身体に垂らす。
「な、なにを？」
「こいつも特製のローションさ。
これですぐに憎まれ口なんて叩けないようにしてやるぜ」
ひんやりとした粘液は
男の手に比べればまだ心地好かったが、
それを塗りたくられるとなると話は別だ。
男はニヤニヤと笑いながら、
数本のローションを浴びせかける。
そして、それを身体中にまんべんなく塗り伸ばした。
もちろん、[redacted]にも、[redacted]間にも。
「……こんなものくらいで、
わたしがどうにかなるとでも思ってるの？」
「それはしばらくしてからのお楽しみさ。
もちろん、ただ放置なんてしてやらねえぞ？
たっぷりとこの感触を味わうがいいさ」
他の男たちが塗るのを手伝う。
腹部に、太ももに、そして腋に。
男の手でこねられ、ネトネトとした嫌な感触になった
ローションはもはや不快以外のなにものでもなかった。
身をよじり、何度も逃げだそうとするが、
身体の自由は戻るどころかより一層
利かなくなっている気がしてならない。



「よおし、もっと擦り込んでやれ。
ついでに気持ちよくなるように、
優しく愛撫してやるんだぞ？」

言われるまでもないといった様子で、
男たちは各々ティファの身体をまさぐっていた。
太ももから股間を撫で回す者、胸をもてあそぶ者、
顔に指を這わせる者。
そのすべての指先が、まるでナメクジのように感じられて
ティファは心の中でうめき声を出してしまう。
声に出さなかったのはもちろん、
男たちを悦ばせたくないからだ。

（なにこれ、気持ち悪い。ただ触られるだけより、
生々しさが強くて……くうっ）

大勢にまさぐられているという異常な状態だからだろうか、
普段よりも敏感になっている気がした。
今太ももを触っている指は、
細くてちょっとおどおどしてる。
顔を撫でている男はただ荒々しいだけだ。
腹をさする手からは、早くこれ以上のことがしたいという
焦燥感さえ読み取れた。

（なんなの？　いったいわたし、どうなってるの!?）

指の距離が分かれば分かるほど、
まるで頭の中を直接触られているかのような感覚に襲われる。
それは脊髄を直接刺激されているようで、
否応なく昂ぶらされているのが分かった。

（駄目……このままじゃ、わたしおかしくなっちゃう！）



「くくく、どうした？　ずいぶんと苦しそうじゃないか？」
「気持ちいいならいいって言わないとダメだぜ？」
「言っちまえば楽になれるってもんだしな」
「だ、誰があんたたちなんかに――っく、
身体さえ動けば、こんなこと……あぁあ」
「負け犬の遠吠えだな――あっと、そろそろ、
一番大事なところを触ってやらなくちゃな」

「ひっ――」息を呑むティファににやついた笑いを見せつけ、
男がショーツの中に指を突っ込んだ。
そしてそのまま、遠慮なく女性器の中へと指を滑り込ませる。

「あっ、くあぁああっ――！　そ、そこはあああっ――！」
「はっはっは、もうグチョグチョじゃないか！
愛液がまるで滝みたいに溢れ出てるぜ！」
「駄目っ、ぬ、抜いてっ――指を抜いてぇ！」
「もうこんなに蕩けきって、
早くち○ぽが欲しいだろうなあ？　ええ？」
「ち、違う……わたしは、そんなこと……んっく！
いや、それ以上突っ込まれたら、
おかしくなっちゃうっ、んぅう！」
「おかしくなっちまえよ。俺たちはみんな、大歓迎だぜ！」

まだ未熟な膣に、男の荒々しい指が突き込まれた。
何度も何度も出し入れされて、ティファは目の奥に火花を見る。

「いや、いやっ！　おかしくなるっ、
頭の中、爆発しちゃうぅ！」
「まずは1発目――ほらっ、イっちまいな！」
「あぁっ　きゃぁあああああああああ！！」

頭の中の火花が、大きな爆発となった。
同時に身体が跳ね上がり、
まるで体内で爆弾が破裂したかのような衝撃を受ける。

「ああ、ひっ、ふあ……わ、わたし――
イった、イっちゃった――あぁああ」



ぐったりとするティファに、男たちは容赦なく襲いかかる。
更にローションを振りかけ、
まだ身体中に塗りたくっていった。

「い、いや――これ、なにかおかしい……」
「特製だって言ったろ？
このローションは催淫効果もあるんだ。
つまりおまえは、
媚薬を身体中に塗りたくられてたってコトなんだよ」

「あぁあ……」
絶頂にも似たため息が漏れた。
感度が上がっていたのはそのせいだったのだ。
でなければ、指を突っ込まれただけでアクメに
達するなど考えられるはずもない。
しかも、こんな男たちに犯されてイくなど。

（駄目……このまま続けられたら、
わたし堕ちちゃうかも。助けて、クラウド！）

男たちの手は、更に淫らさを増していた。
一度絶頂を迎えた身体が、少しの刺激でも
官能的に感じるようになってしまったのだろうか。
男たちを嫌悪しているはずなのに感じてしまう。
そんな不快感に、ティファは心のタガをゆるめ始めていた。

「ほら、どうした？　もっと俺たちを楽しませてくれよ」
「イくところを見せてくれ」
「快感が足りないのか？
それじゃあ、もっとくれてやろう！」



「あぁ、膣口！　もうこれ以上……んああああ！」
ショーツを剥ぎ取られ、また膣へと指を伸ばされる。
遠慮なく突き込まれた男の指に、
激しい絶頂感を覚えてしまった。

「あぁああっ！　いやっ、い、イくぅううううっ！！」
「ははは！　挿入れただけでイっちまうなんてな…」
「ひゅう、たまらないぜ！」

ティファはなんとか抵抗しようと、
股間を這う手を払いのけようとした。しかし力は入らず、
むしろ誘い込むようなポーズを取ってしまう。

「おいおい、指一本じゃ足りないのかよ？」
「このお姉さんは荒々しくされるのが好みなんじゃないのか？」
「その方がこっちも犯し甲斐があるってもんだけどな」
「ち、違う――違うの――あぁああっ！」

そう言う間にも、掻き回されている膣から
淫らな水音が響く。ぐちょぐちょと、
まるで水飴を練るかのような粘っこい音は、
耳からもティファを犯していた。

「あぁ、来る。また・・また来ちゃうう！」



嬌声をあげ、身体を跳ね上げる。
自由意志では動かない身体も、
快楽や絶頂には反応するようだった。
二度三度と跳ね、バウンドする。
男たちはそんなティファを見て、
感心したように吐息を漏らした。

「すげえな。ここまで痙攣するもんかね」
「こいつがイきやすいってだけなんじゃねえか？」
「可愛ければなんでもいいよ。
ほら、もっとイかせてやろうぜ」

（もう……駄目……頭の中が、真っ白になって……いく）
「見ろよ。もう大洪水だぜ」
「なあ、そろそろいいんじゃねぇ？　早くブチ込みたいぜ」
「まぁ待てよ。もうすぐだって。
ほら、見てみろ。こいつのアクメ顔。
今に自分から挿れてってすがりついてくるさ」
「違いない。どうせだから、
堕ちるところまで見てやろうぜ」

男たちの言葉は、もう判断不可能になっていた。
ティファは絶え間なく襲いかかってくる
官能の電撃に身も心も打たれたまま。
そして何度も何度も跳ね上がる。
淫靡さまざまな絶頂感が、
ティファのすべてを冒していく。

「ああ、あああああ、あぁあああっ！」

男たちの指先が、身体中の敏感な突起をつまみ上げた。


クリトリスをつまむ指に
鮮烈な快感を覚えた。
乳首を引っ張る指に刺激的な
官能を湧き上がらせた。
更に身体中を揉まれ、くすぐられる。
表面の肌だけではなく、
体内までも掻き回される。
今はもう肌の全てが
性感帯のような状態だった。
〈どうしてこんなことに？ 媚薬のせい？
それとも、わたしがセックスに飢えてたのっ〉
もう完全に正常な思考ではなくなっていた。
しかし自分ではそれに気付けず、
何度も打ち寄せてくる絶頂の波に
心の奥までひたされていくだけ。
〈気持ちいい。もうなにも考えられない……
もう、抵抗なんてできない！〉
嫌悪感も不快感も、罪悪感まで消え去る。
今のティファには、
快感しか残されていなかった。
「わ、わたしっ……
ああああああああああ
あああああああ！！」
強い叫びが、最後の理性を吹き飛ばす。



「お、お願い……もう、挿れて、
指だけじゃ、もう足りないの！」
「はは、はははっ！　堕ちた堕ちた！」
「意外と粘ったな。指がふやけちまったぜ」
「おいおい、もっと頼み方ってのがあるんじゃないのか？」

男たちの笑い声も、
今のティファには極上の音楽に聞こえた。
快楽を導く、淫靡な音楽。
ティファは恥も外聞もなく男たちにすがる。

「お願い。もっと、もっとして欲しいの。
感じさせて欲しいの！」
「乳首だけじゃ足りないってさ」
「こいつはそうとうな淫乱だな。驚いたぜ」
「淫乱でもいいから。お願い、
アソコの奥がうずいて――わたしっ！」
「だからさ、おねだりするには、
それ相応の頼み方があるんじゃないのかって
言ってんだよ」

男の1人が、はち切れんばかりに屹立した
ペニスを見せつけてきた。
ティファはその巨大さに目を奪われた。
ソレが膣内に入ってくることを想像して、
期待のあまり息を呑む。

「そ、その大きなモノで……」
「モノぉ？　おいおい、
ずいぶん粗末な言い方してくれるじゃないか」
「その凄いおち○ちんで、
わたしのおま○こ犯して！　犯してくださいっ！」
「あははははっ！　いいぜー？　でも、その前に……」
「え？」



「まずはで準備してもらわないとな！」
男は、きょとんとしたティファの口へと
黒い切りペニスを突き込んだ。
「んぐっ、んんっ……んう、うう……」
「今まで気持ちよくしてやってた分、
まずはちゃんと奉仕してくれよ！」
生臭い男の味と匂いが、口の中いっぱいに広がった。
しかし普段なら嫌なはずのそれも、
今は官能を涌かせるもの。息苦しさはあるものの、
ティファは自ら進んでペニスを口に頬張った。
〈わたし、こんな男のペニスを舐めてる。
フェラチオしてるんだわ〉
そう思っただけで、下腹部が熱くなるのを覚えた。
それが快楽への情熱となって、
慣れていないはずの舌さばきでもかろうじて
男を悦ばせることに成功する。
「おお、おおお！ ぎこちないけど、
なかなかのもんだ……くう！」
「んじゅっ、じゅぷ、ふっ……んん、
ちゅっ、ぢゅぷ」
唾液が溢れる。意識せずとも、淫らな水音になる。
〈わたし、なんていやらしい音を
出してるのかしら……なんてはしたない〉
「くう！ よ、よし。口はもういいぞ！」
「え？」



入れたときと同じように
唐突にペニスを引き抜くと、
今度はそれを乳房の谷間に押し当てた。
「愛液が潤滑油代わりだ。
このデカい胸で、扱いてもらおうか」
「ええ？ ど、どうすれば……」
「焦れったいな。こうやって両側から挟んで、
俺のモノを擦りつけるんだよ！」
「こ、こう、ですか？」
慣れない手つきでパイズリを始めるティファ。
その光景は、男たち全員にとって
激しい興奮を掻き立てる。
しかしティファ本人は、
ただ一心不乱に乳房を揺さぶることしかできない。
「ん、んん。すごく熱い……
けど、これじゃあ、わたし……」
「ちっ。デカいだけで使えない胸だな。
もういいから、両側からぎゅっと抑えてろ」
言うが早いか、男は腰を前後させ始めた。
「おお、なかなかいいじゃねえか」
乳肉の中でペニスが激しく摩擦し始めて、
ティファもようやく官能を覚えた。
熱く脈打つ男のものを、
素肌で直接感じるのは心地好かった。
しかも、男は嬉しそうに腰を前後させている。
（まるで、おま○こに突き立てられてるみたい。
わたし、胸までペニスに
犯されてるのね……でも）
でも、だからこそ物足りない。
胸などではなく、
膣でこの熱さを感じたかった。



「おい、そろそろイくぜ！」
腕を引っ張られ、無理矢理起こされる。
そのまま四つんばいにさせられたかと思うと、
男は容赦なく肉棒を埋めるべき場所へと埋めた。
「あああっ！　あああああああああああああああ！！」
待ちに待っていたモノが来た。
挿入されただけで軽い絶頂を迎えたティファは、
へなへなと腰を砕いてしまう。
しかし男はそれを許さない。腕を引き、
無理矢理身を起こさせて、更に奥へと男根をねじ込ませた。
「ああ、凄い！　凄すぎる！！おち○ちんが、
奥まで来ちゃうぅぅううっ！」
「おおおお、たまらねえ！　こんな名器初めてだぜ！」
男は、ケダモノのように腰を振った。
相手を感じさせようなどという気配は一切なく、
ただひたすら射精するためだけに膣を貪る。
「来るっ、来るっ！　子宮まで来ちゃうっ！
お腹の中、壊れちゃうぅ！」
「うおおおおおおお！　でっ、出るぞぉお！」
「来てっ！　中で来ていいから……ああああっっ！！」
男のモノが爆発した。
膣内を熱いものが満たし、ティファも絶頂を迎える。
「ああ、熱い……おま○この中、
精液でトロトロになって……ああぁ」



「まだまだ！　すぐに次のザーメンを呑ませてやるぜ？」

間髪入れず、男が交替する。

唾液と精液でとろけきっているティファの身体は、すぐさま新しいペニスを受け入れた。

「あぁあっ！　ふっ、太いっ……蕩けちゃう。おま○こ蕩けちゃううう！」

「くぅう～っ、締まるぅ。確かにすげぇ名器だぜ！」

男はティファの身体を持ち上げ、騎乗位で膣を突き上げた。たぷたぷと揺れる乳房に嗜虐心を刺激されたのか、乳房に思い切り掴みかかる。

「あぁ、もっとしていいの。強く、おっぱい握ってぇ……乱暴にしてぇ！」

両方の乳首をつままれ、引っ張られる。

普段なら痛みでしかないはずなのに、今は性的な刺激としか感じられなかった。

ティファにはもう、そんな自分を恥じらう気持ちもなく、ただ官能を貪るだけ。

「あぁ、また来る。突き上げられてイっちゃう。おっぱいでイっちゃううぅ！」

「イけ！　イっちまえ！　ほら、ほらほらっ！」

「あぁあああああああああああああ！！」

頭の中が真っ白になった。

そしてしばらく余韻を味わったあと、ベッドへと倒れ伏す。

そんなティファに、別の男が覆い被さった。



「おい、もう終わりだとか思ってるんじゃないだろうな？」
男が、正常位でティファを組み敷いた。
精液のるつぼとなっている膣は必要以上に熱く、
そして滑った。しかし男は構わず、
激しい前後運動を始める。
「あふっ、ンッ、すごい、激しいっ……」
「あああ、こんなの凄すぎるぅうっ！」
「まったく凄いぜ。こんだけ犯されまくってんのに、
まだキツいまんまなんてよ――っくー！」
「もっと……ああ、もっとちょうだい。
もっとたくさん、おち○ち○ちょうだい」
「エロすぎだぜ……こんなんじゃ、こっちの方がもたねえ」
男の方が、腰を振りながら苦悶の表情を浮かべる。
少しでも気を緩めれば、すぐに射精して
しまいそうなほどの名器に、
その場にいる男全員が感嘆の吐息を漏らした。
「こりゃ、たっぷりと楽しませてもらえそうだな」
「俺たちの方が先に搾り取られちまうんじゃねえか？」
「なに、それならオトモダチを呼んで
やりゃあいいじゃねえか。
この女が精液で溺れるまで犯し続けてやろうぜ」
挿入していた男がペニスを引き抜いた。
そして身体中に精液を振りかける。
「あああ……すごい……いい匂い……」
ティファはそれを身体に擦り込みながら、
恍惚の表情を浮かべて男たちを見た。
そして、新たな男がティファの膣へと
埋もれていった――



「ぅう…　うえっぷ。ダメだ。
やっぱアタシ、飛空艇苦手え……うっぷ」

飛空艇で目的地に辿り着いた途端、
ユフィは千鳥足で街へと赴いた。買い物があるから、
と仲間たちには告げたが、その実、
乗り物酔いしている自分を
見せたくなかったというのが本音だった。

「みんなよく平気だよなぁ――くそう、
ウータイ一の忍、最大の弱点だわ……あれ？」

まだ天と地がくるくると回っている状態だったが、
なにか良からぬ輩が近寄ってきたことだけは分かった。

「よお。ずいぶんとご機嫌じゃんっ？」
「俺たちと一緒に遊ばない？」

見たこともない、むさ苦しい男たちだった。
（ナンパか。鬱陶しい）
ユフィは気分の悪さを隠すこともなく、
手で追い払う仕種をする。

「別にお呼びじゃないって、あっち行きなよ
って、お、おい。なんだよ！？」
「まあまあ、そう言うなって」
「そうだよ。きっと楽しいぜ？」

男たちは数人でユフィを取り囲んだ。
路地裏に上手く誘導されていることに気付いたときには、
すでに退路も断たれていた。

「ほら、こっち来なよ。一緒に行こうぜ」
「こらっ、ちょっと　触るなっ！」
うっぷ、うぅ――力が出ない。
くそっ、どこに連れてく気なんだよ」
「ものすごく楽しいトコロさ」
「特に、俺たちにとって、な」

男たちが淫らな笑いを浮かべた。
その瞬間、ユフィは小さな部屋へと押し込まれていた。



見知らぬ部屋に連れ込まれ、羽交い締めにされる。
普段なら簡単に振りほどけそうな行為も、
乗り物酔いで弱った身体には辛い仕打ちだった。

「お、お前らいったいなんなんだ!?
アタシにこんなことして、ただで済むと……」
「どうなるって言うんだよ?」
「イヤなら逃げてもいいんだぜ?
もちろん、振り解ければだけどな」

下卑た笑いがユフィの耳を打った。
それと同時に、男たちがいきなり
身体をまさぐり始める。
ある者は太ももを撫で、
ある者は素肌の臍窪に舌を這わせた。

「ひっ!? なんなんだよ!?
誰がそんなコトしていいって言った!?」

しかし男たちはユフィの言葉に耳を貸さず、
一心不乱に臍窪を舐めたて、服の上から胸を揉みしだき、
太ももを割って股間や尻に手を伸ばす。
さすがのユフィも、ここまでされれば男たちの目的が
陵辱であると気付く。

「お、おい! お前ら、本気で怒るぞ!?
アタシが本気を出せば、お前らみたいな
ゴロツキの3人や4人っ!」
「へえ? だったら本気を出してみなよ?」
「そうそう。イヤなら逃げればいいって言ってるじゃない」
「のこのこ付いて来たあんたも、
けっこう期待してたんだろ?」

男たちは笑って取り合おうとしない。
実際、ひどく酩酊しているような状態のユフィに、
男たちを振り解く力はなかった。

(まずい……このままじゃアタシ、
こいつらに犯される!?
そんなのイヤだ。なんとかして逃げ出さなくっちゃ!)

その考えを見抜いたかのように、
男たちがユフィの服を剥ぎ取った。



「なかなか強情なお嬢さんだな」
「なあに、お楽しみはまだまだこれからさ」

男たちは舌なめずりしながら、ユフィの身体をまさぐり続けた。しかし、1人がロープを持ち出すと、頷き合って少女をコンテナに縛り付ける。

「くっ……こ、こんな縄。いつもならすぐに抜け出せるのに……」
「さあ―― お嬢さんがどこまでイかずに耐えられるか、みんなで賭をしようぜ！」

「30秒だ」「1分だ」「3分は持つだろう」
好き勝手な言葉が飛び交い、淫らな視線を送りつける。ユフィはそんな男たちの下劣な精神に、強い嫌悪感を沸き上がらせた。

「お前らなんかに屈したりするもんか。こんなコトで、アタシを好きにできるなんて思うなよ！？」
「そういう気の強いところも可愛いな」
「そういう女を屈服させるのが、なによりも楽しいんだぜ」

ゲラゲラと声をあげる男たちに、ユフィは憎悪の目を向けた。しかし、頭の中はまだ酩酊状態にあり、逃げ方を考える思考力もなく、普段の体捌きの半分の力も出ないまま。

（ちくしょう、ちくしょう！ クラウド……ヴィンセント。助けに来てよお）

強気なものが、ユフィから抵抗する精神力さえ奪っていった。



男たちの愛撫が勢いを増した。
乳房を、腹を、もちろん股間も。
ユフィは声を殺そうとするが、
敏感な部分を攻められる度に
我慢できずに喘いでしまう。
それが男たちを悦ばせるだけだと分かっていても、
官能のコントロールなどできるはずもなかった。

「ほらほら、だんだんいい声になってきたぞ」
「ちっ、もう30秒は軽く過ぎちまってるな。」
「オマエの指マンが下手なんじゃねぇの？」
「そういうことは、
乳首だけでイかせられるようになってから言うんだな」

片方の乳房を揉まれ、
片方の乳首をしゃぶられていた。
つままれたり引っ張られたり。
吸われたり揉まれたり。
下手をすれば、胸から与えられる快感だけでも
達してしまいそうなほど。
更に、股間からの快感は凄まじかった。
また未熟な膣を、乱暴にすることなくあくまで
甘く揉みほぐされている。
中指や薬指で膣の浅瀬を掻き回され、
親指でクリトリスをこね回される。
女性器の内と外からの二重攻撃に、
ユフィの理性は消し飛ぶ寸前だった。

「ダメぇ……、も、もう、頭が真っ白になっちゃうっ……」
「身体が、おかしくなっちゃう！」
「なんだ、大口叩いてたわりには、
もうギブアップか？」
「ときには、ちゃんとイきますって言えよ？
でないと分からないからな」
「でも潮吹いてくれれば分かりやすいけどさ。
はははは」

男たちの嘲りも、徐々に耳に入らなくなっていた。



「お、お腹の中、掻き回されてるっ！
グチャグチャって　凄い音、出してる……
あ、アタシ、気持ちよくなってるぅぅぅっ！」
「はははは！　いいぞ、もっと鳴け。
もっと鳴け！」
（ダメ、ホントに、もうなにも考えられないっ！
アタシこのまま……あぁあ！）

膣に滑り込んでいた指が、荒々しく動き始めた。
2本入った指が中で交差し、暴れ、
まだ綺麗なままの膣壁を汚していく。
まるでペニスのように出し入れしてくる。
突き込まれる度に圧迫感を感じ、
溜まっていた愛液が膣外へと噴き出した。
それは苦しいのだが、
引き抜かれるときには喪失感を覚えて
切なくなってしまう。
そしてまた深く挿入されて、
苦しいながらも安堵した。

「はあ、はあ、はあ
な、なにか来る。来ちゃいそう……
あぁあああああ！」
もう、声を抑えることはできなかった。
凄まじい官能が声に乗って飛んでいく。
「イ……イく。アタシ、イっちゃうぅー
指で犯されて、イっちゃうぅぅぅぅ！」
全身を指先で愛撫されて、
ユフィは初めての快感に達した。














堕ちたユフィ











F. F. FIGHT Ω 同人誌版

発行／クリムゾン
印刷／大陽出版株式会社

発行日　2006年8月11日

この同人誌は
アクティブタイムHバトルゲーム「F F FIGHT Ω」の
全CGを収録したものです。

クリムゾンフルカラー同人誌第5弾





